
あの日あの時…創立のことども

* 座談会——①



出席者

堀	野	一	男 (司会)
安	陪	百	子
杉	田	賁	至
武	田	良	逸
中	嶋	定	彦
服	部	真	澄
松	浦	清	逸

創立前後の医師会

○司会（堀野） 来年は富田林医師会の創立30周年に当たりますので、その黎明期と申しますか、発足当初から今日までに至る歴史の前半を、当時のご苦労話なども含めながら存分に語っていただきたいと思います。実は富田林医師会発足当時の総会の記念写真に私も載ってまして、現在生き残っている中で一番若いという因縁で、きょうは司会を承りました。

私は、大阪市内に生まれまして、阪大を卒業する直前の昭和20年、大阪の大空襲後、両親の生れ故郷である富田林地区に疎開して帰ってきました。当時、近鉄の南大阪線はがらがらで、いつ乗っても富田林まで座って帰れるという状態でした。ところが、終戦後南の方もだんだん人口がふえてまいりまして、富田林も昭和25年4月に市制が施行され、それに伴って富田林市医師会が発足いたしました。

それ以前は、南河内郡医師会富田林支部という形だったと承っておりますが、長い間、南河内の医師会長をしておられたのが武田先生のお父さんなんです。

○武田 府医ニュースの7月18日号に初めてうちのおやじの名前が出ました。

○司会 それはいつごろですか。

○武田 昭和14年のことが書いてあります。もっと以前からやっていたけれども、うちのおやじの名前も南河内のことも出たことはなかったのですが、今度初めて出てきました。

○司会 お父さんがオフエンしておられる時分、往診とか診察の数はどんな程度でしたか。

○武田 ぼくは中学校を出てからあっちこち遊学していて、ほとんど富田林の町にいなかったの

で。

○司会 当時の往診なんかは人力車でしょう。人力車の車夫は同じ家に住んでいたんですか。

○武田 同じ家ではありませんが、貸家みたいなことをしてましたから、近所の持ち家におりました。

○司会 当時の初診料とか往診料はどれくらいでしたか。

○松浦 初診料というのは取らなかったですね。ただ注射して何ぼ、薬渡して何ぼで、注射が大体1円、内服が2剤投与で2日分で1円、子供だと80銭でした。煎剤とか浸剤も使いましたが、それも1円です。

○司会 それは何年ごろですか。

○松浦 昭和10年前後から、17～18年ごろまで続いたんじゃないでしょうか。

○安陪 そのときは現金じゃなくて、半年節季じゃなかったですか。

○松浦 そういう人も多かったですね。

○司会 その時分の往診料はどんなものですか。

○松浦 昭和3年か4年に亡くなられた中嶋先生のお父さんが人力車に乗っておられましたが、大体ぼくとこの裏、中野村まで来て1円で、距離が遠いと多少は高かった。それから早朝は高くて1円50銭、夜もやっぱり高くて2円から3円でしたでしょうね。その時分に山口さんは馬に乗ってはりました。

○武田 うち、昭和9年ぐらいから小型のオースチンに乗ってましたが、その時分、新車で3,000円でした。

○安陪 それで全部運転も教えてくださいよね。

○武田 そうです。だけど、うちのおやじは肥えてましたから、運転手を置いていました。

○松浦 その当時の往診料が5円ぐらいじゃな

いですか。

○司会 南河内郡医師会にはどれくらいの支部があったんですか。

○松浦 そういう支部というのは余りなかったと思うな。

○武田 昔はなかったなあ。

○杉田 私らのときはありました。

○松浦 1農区、2農区、3農区、4農区といまして、富田林は1農区です。2農区が河内長野の方で、3農区が狭山、4農区が古市、藤井寺だったと思います。

○司会 そうすると、1農区、2農区、3農区、4農区という部分が南河内郡の医師会の単位ということですから、結局支部としては4つくらいですね。それで、富田林支部の医師会の会員はどれくらいの人数でしたか。

○松浦 6~7人と違いますか。山田の北小路先生、山田君のお父さん、木梨先生、武田先生、山口先生、高田先生。

○安陪 うちの父も大正10年ぐらいからこっちへ来ていました。

○松浦 ぼくを入れて大体8人ですか。

○武田 中嶋先生のお父さんもいてはったし、腸チフスで戦地でなくなられた高田先生のご主人もいてはった。

○司会 当時の医師会の活動として、学校医とか予防注射というようなものはやっていたんですか。

○安陪 学校医はやりましたね。

○杉田 種痘と身体検査と、トラコーマまで診ました。いまみたいにアウゲとか分離されずに、ツアーンまで診て、虫歯何本とか、トラコーマありとか、全身を診ました。

○司会 学校医の仕事として予防注射もやっていたんですか。

○杉田 そうです。予防注射といっても種痘ぐらいですね。

○安陪 チフスは戦時中でした。

○司会 戦後はやっていないんですか。

○安陪 戦後もやりました。村医、町医というのがありまして、富田林市になってからは市医になりましたけれども、そういうふうになっていました。

○司会 町医と学校医とダブっている人もあるわけですか。

○安陪 ほとんどがダブってます。

○武田 それぞれ住居地の学校へ行っていました。その時は尋常高等小学校まででした。

○松浦 報酬は、校医と村医とは10円やったと思う。

○司会 10円でもその当時の金としては大きいですな。

○安陪 年俸ですよ。

○松浦 当時、予防注射といえば種痘だけで、5月か6月にやるのですが、その後役場の2階で吏員と一杯飲んで、そこで年間の手当10円を渡してくれるのです。ところがその10円に役場の人が目をつけて、それから二次会に行こうということになるんです。

○司会 結局、もらっても自分のふところに入らずに飲まってしまうわけで、向こうを喜ばせてやるということですね。

○松浦 当時はそういう仕組みになってました。

○武田 藤岡先生もちょっと後やったけど来てはりました。

○松浦 そうすると、10人ぐらいですか。

○司会 南河内郡の最後の医師会長はどなたでしたか。



安
陪
百
子

○服部 南河内郡の医師会長は、藤野先生（藤井寺）のお父さんでした。

○武田 うちのおやじが病気で倒れて、藤野先生にかわって、終戦になったんです。

○司会 富田林市医師会に変わるときの南河内郡の医師会長はだれだったんですか。

○中嶋 終戦の21年には藤野九三郎さんが医師会長で、23年4月から古川権蔵さん（三日市）です。あの時分は任期は1年でしたが、昭和24年は吉村先生でした。

○司会 そうすると、われわれの医師会が独立したときの最後の南河内郡の医師会長は吉村先生（山中田）ですね。そのときの富田林支部の支部長はどなたですか。

○杉田 たしかそのときは、藤岡先生のお父さんの藤岡長正さんでした。

○司会 そうすると、富田林市医師会の独立当時の支部長は藤岡先生ですね。

○松浦 吉村君も会長をしたことがありますよ。

○服部 富田林市医師会になるまでは吉村先生でした。

○司会 昭和25年4月1日に富田林医師会として独立したということですが、最初の医師会長選出に当たっている問題があったと聞いておりますが、選出のいきさつを聞かせていただけますか。

○杉田 吉村先生が初代会長に非常に野心を燃やしておられたんですが、藤岡先生のお父さんが富

田林支部の会長であったということから、当時の医師会会員の勢力分野は二分されていたわけです。私どもは壮年組であちこち走り回っていたんですが、たまたま金剛大橋の上で吉村先生につかまり、「杉田君、次の会長はだれがやるんだ」と言われたので、「やっぱり富田林支部が富田林医師会になるんだから、藤岡先生のお父さんがやられるのが当然じゃないですか」と言ったんです。すると、「おまえまだ若いな、富田林の医師会の歴史もよう知らんな。おまえも藤岡の子分か」と言って、えらく怒られました、それまで何も知らなかったんです。

藤岡君の家の2階で総会が開かれたときに、藤岡君のお父さんや皆おられるところで、吉村先生がやおら立ち上がって、藤岡先生のお父さんのことを非難されたんです。当時は患者さんの手あぶり用に出す炭火さえなかったんですが、藤岡先生のお父さんに、幸い大和にご親戚があり、大きな山林を持っておられて、そこで実費で炭を焼いて会員に欲しいだけ分配されたんです。私もそのとき、たしか40俵注文したはずです。患者さんが来て、「先生のところに來たらぬくもりまん。こんな炭、配給もないのどこから手に入れはるんですか」と言われるくらいに、藤岡先生のお父さんが、非常に努力されていました。ところが、そのときちょうど吉村先生は警察医をしておられて、しょっちゅう警察へ出入りしておられたので、「正規のルートで入ってないんか。だけど医師会であるがゆえに見逃してたんや」ということを暴露されました。「こういう正しい道を進まない人を会長にしてもええんか。こういう人が会長になるんなら、わしは富田林市医師会をやめて長野の医師会の会員に入れてもらう」と言い出しはったんです。藤岡先生のお父さんも最初は黙って聞いて

ておられたのですが、耐えかねて「あなたが会長になるんなら、おれも富田林市医師会をやめる。それではおれは藤井寺の医師会に入れてもらう」ということになって、收拾がつかぬようになってしまったんです。そのときに私、これを政治的にうまくおさめられるのは服部先生しかないだろうと思って、自転車にホンダのモーターのついた自転車オートバイというので中村まで服部先生を訪ねていきました。服部先生はそのころ非常に着物が好きで、えらい男前で着物を着て来はって、「難儀なことやなあ。ほくも富田林市医師会の会員になるんやからともに考えよう」と言っていたんだんです。その時松岡先生が大同病院の院長をやめてこっちへ来られていて、そのもめごとをじっと聞いておられたんですが、あのおとなしい先生が豹変したこわい顔で、そういうことでは、この地区の地域医療が紳士的に発展しないから、ほくが医師会の会長をやりましょうと。ただし名目だけで、大阪で医師会長の会議があっても、絶対に行かない。(笑)藤岡先生と吉村先生と交代で1年間務めてもらって、会長職というものを勉強してもらってから、第2代目の会長は「じゃんけん」で決めようということになりました。それで勝たはったのが吉村先生で、第2代目の会長になられ、次に藤岡先生になってもらう予定でした、ところが藤岡先生が胃潰瘍で亡くなられたために、そのまま吉村先生になってしまいました。吉村先生がアポで亡くなって、仲谷先生にかわりました。仲谷先生は非常に温厚な方で、ほかにライバルもなく、ずっと務めてもらったんですが、健康と、期するところがあってやれないということで、名コンビであった中嶋先生とともに医師会の役をおりられました。そういう経緯を私ははっきり覚えてます。

堀野一男



○司会 富田林市医師会として独立した当時の医師会員は何人ぐらいですか。

○服部 14~15人と違いますか。

○中嶋 富田林市医師会設立名簿によると36名です。

○司会 富田林市医師会の区域というのは富田林市、河南町、千早赤坂村、太子町の4区域で、現在と全然変わらないということですね。

○杉田 そうです。第一回の総会のときに富田林町が富田林市になり、富田林市医師会が自然発展するので、千早とか河南町のお医者さんに、どうしますかと、行政を通じないで個人的に聞いたんです。すると、「私らも富田林市に入れてください」ということだったので、富田林市医師会に入れてもらいはったんです。

○司会 結局、農区の関係で一緒になってしまったということですね。

私の記憶では、富田林市医師会になるちょっと前に、河南町の青崩の方で赤痢がはやったように思うんですが、そのとき医師会としては、いまのような体制で赤痢患者を扱ったんでしょうか。

○服部 昭和21年4月1日から26年3月の終わりまでの5年間、白木村の寺田に伝染病院がありました。そのとき吉村先生から「服部君すまぬけど伝染病院を預かってくれ」と言われて、21年4月1日に管理運営者、いわゆる院長になりました。そして22年に、いままで日本に無かった恐ろしい

中
嶋
定
彦



武
田
良
逸

発疹チフスがはやりまして、21年11月から南河内郡富田林支部を代表して、ほく1人が大阪の桃山病院に発疹チフスとはどういうものか見学に行ったんです。大体発疹チフスは外国から入ってくる病気で、日本にはないから、当時内地にいた日本人の医師は見たことがなくて、結局発疹チフスだと診断をつけられるのは実際に見てきたほくだけでした。22年1月の終わりから2月の初めに、中村で第1号の発疹チフスが出たということで、ほくが見にいくと、やはり発疹チフスだったので、保健所に届けてほくの預かった伝染病院に入れました。幸い20才の男子で、若かったので助かったんですが、当時発疹チフスは40才過ぎた人ならほとんど死ぬ。ことに酒を飲む者は全部死ぬということでした。私が一番たくさん診たんです。太子町の山田に、亡くなられた中川先生がおられたのですが、「かぜでアスピリンのアレルギーやないかと思っていたけど、ちょっと形が違うから来てくれ」ということで、行ってみると、もう部屋に入ってちょっと見ただけで発疹チフスだということがわかった。あのときほくも42才でしたから、近寄ったらこっちもうつってしまうし、そばに行ったら逃げ腰になって脈をとった。胸をあけさせるとザッと発疹が出ているし、「これは間違いない、あしたの昼死ぬ」と言って帰ってきました。それから一週間ほどして、「先生が言うたとおり昼死にしました」と言ってきた。とにかく発疹チ

フスという熱がでて、4～5日したら心臓衰弱が来てみんな死んでました。

○司会 そんなにたくさん発疹チフスが出たんですか。

○服部 出たんです。富田林より先に中村に出た。というのは、大阪へ皆通うから、電車の中で発疹チフスを媒介するシラミのふんの粉が散ってうつってきたらしいです。

○司会 先生が見られた発疹チフスの数はどれくらいですか。

○服部 12～13人かな。

○司会 この地区で12～13人といたら相当なものですね。

○服部 先に中村に出て、森屋に出て、それから富田林に出た。それがみんな大阪に通っている人です。大阪に通っていない人は1人も出ていません。それから翌年の昭和23年に、青崩で赤痢が出た。あのときほくは富田林の警察医をしていました。いま西口におられる上島五郎さんが署長のときでしたが、「済まぬけど、何やおかしいのが14～15人寝とるから行ってくれ」と電話がかかってきました。それで駐在さんといっしょにジープで行ってみると、それこそ2週間ほったらかした赤痢で、血便と膿が出ますから、部屋に入ったら生臭くてかなわないんです。14～15軒回ったんですが、みんな赤痢で、田舎というものの不衛生さに驚きました。あのころはほとんどが無医村だったとい

松
浦
清
逸



杉
田
貢
至

う関係で、放置されていたんですが、すぐ寺田へ入れました。

○司会 そのときの青崩の状態ですが、結局あの辺は上から流れてくる川の水を使ってたわけでしょう。

○服部 その一番上の4才ぐらいの子が疫痢やったんです。それを川で洗たくして、下の者がその水でうがいしたりしていたものですから、皆うつってしまいました。

○司会 患者数はどれくらい出たんですか。

○服部 20人前後です。

○司会 その当時は杉田先生も行っておられましたかな。

○服部 杉田先生はそのときはまだおいででなかったです。

○司会 当時は医師会でまとまったことはせずに、服部先生がほとんどやられたんですか。

○服部 ほくが1人でやりました。

○松浦 20年にもあちこちでずいぶんはやって、武田先生のお父さんから、いわゆる会長命令で白木の伝染病院を担当させられたことがあります。

○武田 白木の方の伝染病院は寺田のどなたかが担当で、うちのおやじは双葉町という川西のところの避病院を持っていました。

○安陪 いまの双葉町で父が村長をしていて、武田先生のお父さんが避病院の院長をしてはりました。

○服部 そのときは1村当たり何ぼというような形で、富田林、白木村、石川村、中村、河内村の「5ヵ町村組合伝染病院」という名前でした。

○松浦 富田林には富田林、錦織、彼方、新堂が寄って双葉町に持っていて、組合支部いうところに古市とか喜志とか駒ヶ谷の伝染病院があったわけです。

○司会 当時はすでに保健所があったと思いますが、それは警察の管轄だったんですね。

○服部 保健所はあったけれども、行政面までやってなかったの、警察の衛生係というのが担当していました。

○司会 赤痢にはどんなミツテルを使っていたんですか。

○服部 昭和20年8月15日終戦になり、9月1日からいまの千代田にあった陸軍幼年学校が大阪国立病院長野分院になったわけです。ほくは10月30日までそこにいて、帰ってくるときに、何もやるものがないからというので、当時の一番いい薬でスルファチアゾールの500錠入りを6個か8個もらいました。

○司会 チアゾールとかグアニジンとかがいい薬でしたね。

○服部 注射では田辺のトリアノンが最高やった。村長が、「薬ないから何とかしてくれ」というので、これを使えと言って、高い薬をただで奉仕したもんや。



服
部
真
澄

○司会 2つの鎖のついたスルファ剤の最高の薬ですな。

○杉田 私の知人の奥さんが下痢をしながらも、嫁に来たからというので一生懸命掃除をした。ところが、それがデイズンテリーだったもので、おばあちゃんにうった。嫁は嫁に来たという気がねで、しんどいのをがんばってやったために、ステッてしまったんです。おばあちゃんは、血便をどろどろ出してるんやけれども、権力があるから、しんどい、あんじょうしてくれと言う。そのときに初めて、塩野義から出たスルファグアニジンというのを使ってみたんです。昔は赤痢にかかったら2週間か3週間は瀕死の重体で、半数以上は死ぬというのが常識だったのに、その薬を飲ませてもう2日目にそのおばあちゃんはびんびんしてるんです。それで藤岡君のお父さんに、「こんな状態ですわね」と言ったら、「そんな赤痢を2日くらいで治すような強い薬を飲ましたら、人間も死んでしまうわ。あんた若いからそれがわからへんねん」と言われました。それと、今は会長の人徳もあるけれども、行政方面では保健所と医師会はお互いに話し合って、助け合っていくというのが一つのモラルみたいになってますね。ところがそのころは、何かあったら医者の方がえらいので、警官がいつでも医者の方の足を引を張ろうとねらってるんです。それで、パラチフスみたいなのはやってきましたら、医者の方のしりについて歩きよるんです。終戦

直後、ぼくは甲田でパラチフスのクランケを8人診たんですが、ぼっと後ろを向いたら警官がついてきている。それで、もう一回り回って、「きょうすぐに入院や」言うて、皆双葉に入れたんです。そしたら巡査は、「もうちょっとであんたを逮捕しようと思っていた」というようなことがありました。

○司会 戦争が終って富田林市医師会が独立するまで、わずか5年間ですが、その間に軍医として兵隊に行っておられた方がたくさん帰ってこられたと思いますが、その当時は医師会に入会するのにある程度の制限はあったんですか。

○杉田 ええ、ありましたね。いまより厳しかったです。山間僻地で開業してくださいと、その理由は通るんです。山間僻地には医者がおらず。いまみたいに自動車があるわけやなし、交通の便がないから、医者が出向いて行って住民を助けてやらなければならぬ。そういう任務を若い医者は負っているんだ、だからそこへ行って開業してくれと、いまみたいに自動車ですパーッと来られるんだったらいいんだが、来れないんだから山間僻地に行かなければならぬということで、適正配置という意味ではなかったですけども、開業制限がありました。これははっきり言えば既得権の防衛ですね。

○司会 そうすると、杉田先生はある程度強引に開業されたということですか。

○杉田 武田先生ところの前だから開業できないかと思ってたんです。だから警察へ行って、「実は武田先生の前で開業できないから、どこら辺だったら開業できますか」と聞いたら、向こうの台帳が間違っていて、「開業し戦争に応召し、帰ってこられたんだから、当然既得権があるので開業してよろしいよ」と言われたんです。そのときにも藤

岡先生のお父さんが「あんた開業を1年もせんのにそうになっていたのならもうけもんや、そのままにしたらええわ」と言うてくれはったんです。

○司会 終戦後すぐ開業されるときにはそんな状態で、富田林市医師会と名称が変わってからは、比較的自由になってきたといういきさつがあるわけですね。

○杉田 だから岡村先生などは内科や小児科は書けなくて、外科しか標榜できなかったんです。

○安陪 あのころは届けでをして許可制みたいでした。

○杉田 医師会全体のムードが、いまみたいになごやかさがなかったんです。会長さんという怖くて、こんなところに来られへん。(笑)遠くからごきげん伺いするようなものです。

○武田 うちのおやじに怒られたことがあるな。

○杉田 うちの子供がまだ小さかったとき病気になって、私は小児科であっても自分の子供に対して自信がなかったんです。それで、医者同志のよしみで早く診て下さると思って、武田先生のお父さんのところへ行きましたら、「医者であろうが何であろうが、おれは休憩のときには体を休めるんや。そんなに早く診てほしかったら、医者はおれだけと違う、ほかによく働いてるんやからそこへ行ってこい」とえらい怒られまして、怖い先生やなあと思いました。

○服部 とにかく武田先生のお父さんは怖かったですね。クランケが皆言いますわ。しかし、ぼくは武田先生に、あなたのお父さんは本当の医者だと言うんです。患者のために思えばこそほろくそに言うので、へなへな言うてごきげんをとってはやるような医者と違う。やかましく言って、それでも患者がついてくるのでなければ本当の医者ではないと思う。

○杉田 怒りはるのに迫力があるんですよ。あのときはえらい怒られて、順番が来るまで待ってました。

○服部 ぼくが神戸から疎開してきたのが昭和19年12月10日でしたが、奥千早にもう80歳近くなるおじがおりまして、先に武田先生のところへあいさつに行ってこいと言うので、ぼくは14、15日ごろに武田先生のお父さんのところへ、「こちらへ疎開しましたのでどうぞよろしく」とあいさつに行きました。とにかく武田先生のお父さんは怖い人だったけれども、本当の医者ですな。いまの先生方は見習わなければいかぬと思うね。そういう先生がだんだん少なくなっていくことは、われわれ年をとった人間としてはさびしいことです。

○安陪 患者が「ちょっとかぜを引きました」と言ったら、「かぜと自分で診断がついてるなら、何も医者のところへ来んでええ」と言ってね。

○服部 ぼくが疎開したところが武田先生の地盤だったんです。「寛弘寺、神山、白木」白木に1人、プノイモニーを起こして、それからメニンギーチスを起こした患者がいたんですが、そのとき武田先生のお父さんから電話があって、「服部君、済まぬがわしはきょう行けぬから代診してくれ」とおっしゃるので、白木に往診に行くと、もうメニンギーチスを起こしている。それでぼく帰るなりすぐ電話をして、「先生、これはあきまへん、もう2、3日です」というと、武田先生は「そうか、ありがとう」とおっしゃった。2、3遍、武田先生のお父さんには代診を頼まれて行ったことがあります。

○武田 ぼくもよく怒られて、ぴりぴりしてました。

○司会 富田林市医師会となって、第1回の総会はどこでしたか。

○杉田 第1回がそれだったんです。第2回からはちゃんと記録が残っているはずですよ。

○司会 第2回の総会からは吉村先生がやられて。

○武田 第1回は松岡先生でした。

○司会 そうすると、第2回の総会ぐらいからは、人数も少ないし、まとまっていたわけですね。中嶋先生に聞きましたら、その当時、医師会長の任期は1年ということでしたが、実際は吉村先生が2～3年やられて。

○中嶋 吉村先生も1年ぐらいですよ。

○司会 それで、もう倒れられたんですか。

○武田 昭和28年4月20日にお亡くなりになっています。

○中嶋 そうすると、26年からまる2年やっておられるんですね。

○司会 それから仲谷先生にかわられて、20年近くやられたわけですね

医療制度

○司会 私自身は阪大にずっと行っており、その間、夜だけ開業していたのですが、そのころ保険制度が日本に普及しました。保険制度というのは戦前からあって、われわれのときはたしか保険は任意制度で、昭和25～26年ごろから全部の医師が保険医に加入したと思いますけれども、正確にはどうだったでしょうか。

○松浦 強制加入のような状態になったのは36年10月1日からです。

○杉田 ただ千早は国民保険は早かったですね。戦前からあった。

○松浦 東条村も早かったし、河内村も早かった

が、あの時分は任意加入でした。

○服部 あれは昭和10年ぐらいと違いますか。

○司会 われわれが入会した当時は全部保険医として入会しましたか。

○杉田 自由でした。

○司会 自由でしたけれども、皆保険医になりましたな。

○服部 保険がふえてきたから、ならざるを得ぬようになった。

○司会 国民健康保険ができたのが昭和30年ごろだったと思いますが、それから36年に皆保険で、われわれは皆保険医になりましたね。われわれが入ったときは甲地と乙地があり、富田林市は当然乙地でした。乙地が10円50銭でしたか、ちょっと端数があったと思います。

○安陸 ありました。計算するのがややこしかったです。

○司会 乙地が甲地と一緒にになったのはいつごろだったですか。

○松浦 富田林市は最後まで乙地に残されたんです。

○司会 甲地と乙地があったために、われわれは日本全国を全部甲地一本にせよという運動をやりましたね。

○中嶋 甲・乙撤廃の運動を始めるために33年8月「乙地会」というのをつくったんです。そして各地区から運動費を集めて、いろいろ運動したんです。36年になってやっと撤廃されました。

○司会 その次に医薬分業問題が出てきました。医薬分業についても、われわれは相当反対運動をやって、結局骨抜き法案に変わってしまった。もちろん健保改悪というような趣旨でも大分運動をやったですね。最近はあることは余りやりませんが、当時はたしかに自動車に乗って、



第六回定期総会（28・3・28）

メガホンでどなって回ったのを覚えています。

○松浦 長野の何とか会館というところでやったことがありました。

○司会 昭和25年に富田市医師会が独立した当時、患者の何割くらいが健康保険に入っていたんですか。

○杉田 保険を出したら悪い薬を使うから、保険なしで診てくださいという人が多かった。

○司会 いまは保険でも相当自由に薬が使えますが、当時は健康保険は制限診療で抗生物質の使用基準とか副腎ホルモンの使用基準などがたくさんありましたね。

○安陪 混注してはいけなとかね。

○司会 抗生物質でペニシリンとかストレプトマイシンなどが出始めたときは、自由に保険が使えたんでしょうか。

○安陪 初めにトローチ、次に服用、その次に注射と言います。それで私、川瀬先生（古市）に「小児科で薬を飲まない子はどうするんですか」と言ったら、「無理でも飲ませなさい」とおっしゃるんです。「きげんのいいときでも飲まないのに、熱が出ているときは飲みません。小児科は無理です」と言ったんです。それやったら平素から母親を教育しておきなさいと言われた。「そんなこと、なかなかできない。薬を飲まない子には注射しな

ければしょうがないのところがいますか」と言ったら、「それもそうやなあ」とおっしゃったことがあります。

○司会 そのときは保険は通ったんですね。

○安陪 そのときは理由を書けということでした。

○司会 アップなどでしたら、抗生物質を使うよりも切った方がいいということを知ったこともありません。

○安陪 その状態によって、切れる場合と切れない場合がありますからね。それからザルグレとB₁と一緒に打つでしょう。そうしたら、B₁は学理的にはいいけれども、健康保険経済ではこれはいけませんと言われたりしました。

○司会 そうすると、健康保険が発足した当時は相当な制限診療で、それがだんだんほかにされてきて、現在のように来たということですね。

○杉田 富田市医師会になった前後から現在に至る、いわゆる地域医療のあり方ですが、その当時、この近くでは病院としては国立病院だけで、ほかになかったです。だから、入院させたい患者も皆家庭治療で、松浦先生なんか山形峠地まで人力車で、後ろを押す人と前を引く人と2人で青崩の坂を登りはったんでしょう。それから自転車になって、次に自転車オートバイ、いわゆる単車

の前身ですな。それから中古のオンボロ自動車をあちこち探し回って乗って、そして、今日、堀野先生に乗せてもらったような欧州車以上のノンクラの自動車というふうに進んできた。同時に、受け入れ体制もPL病院もでき、近大付属病院もでき、重症患者を家庭内で診ることがずっと少なくなった。

○司会 昔は相当重症の患者も家で診てましたね。プノイモニーくらいだったら診とった。

○安陪 それもクランケが医者に対して、この先生にかかってたら大丈夫という信頼感があったからです。いまは、後から又句言われたらかなわぬから、このぐらいで送ろうかということになる。

○司会 その当時はいまのように医事紛争が起る可能性は少なかったんですね。

○杉田 3日前に貼った注射のばんそうこうをはがして、そこがアイテルグしていても、黙って手を出してまた次の注射してもらった。いまはちょっとアイテルグしたら30万円取られます。

(笑) いまは、往診しなければならぬようなクランケは皆入院しますわ。

○松浦 一度往診しても、こっちら「入院しなさい」と言いますな。

○中嶋 昔は往診が多かったでしょう。皆1日に10軒、20軒と回っていた。

○杉田 インフルエンザなどがはやったときは20軒~30軒回った。

○司会 ほくらでも注射器がなくなってしまって、消毒もせんとパッパッとやったこともあります。

○中嶋 夜2時ぐらいまで回ったこともありますよ。

○司会 その当時の予防注射も、いまみたいに厳密にやらなかったと思いますが、どうですか。

○松浦 注射器も全部こっちらから持っていくんですから。

○司会 そういえば種痘でもメスを自分で持っていきましたな。

○松浦 いまだったら注射針を1本ずつかえますが、昔はこちらから持って行って、1本で100人も200人も打った。

○武田 それでも事故がなかったもんな。

○司会 結局、いまよりも患者と医者との信頼感が強かったということでしょう。われわれが開業した当時は相当自由患者もあったわけでしょう。田舎の方ではその都度金をもらわないで、節季にももらったような経験もあります。

○松浦 掛け取りみたいなもんや。

○司会 そうすると、相当な未収もあったわけですね。

○杉田 ありましたね。その移り変りの過渡期には、未収はものすごくあった。本人がどんどん転動していなくなるんです。

○司会 だんだん自由診療が減り、健保制度が発達するにつれて、皆保険の患者になってしまいました。結局、医師会で健保のレセプトをまとめて出すということになりました。その当時中嶋先生が会計をしておられましたが、保険調整費というのを取ったのを覚えています。保険調整費は1,000分の1でしたね。

○中嶋 1,000分の1です。

○杉田 ほくら一番若かったし、物すごくあったんですわ。それであんまり気の毒やというので、1,000円以上オーバーした場合は1,000円でいいというようになったんです。

○司会 保険調整費を取って4~5年してからそうなったんですかね。ほくらも1,000円どまりで堪忍してもらったと思います。調整費を廃止したの

はいつごろでしたか。

○武田 5～6年前まではありました。会費は余り取ってなかったから、医師会の財源がなかった。

○中嶋 財源がなかったというよりも平等割りと収入割りという意味で、一般の会費と予備調整費の金額と同じくらい集まったんでしょう。歯科医師会などはいまでも平等割りと収入割りと2本立てで集めてるかもしれません。続けていたらよかったですけど、調整事務がめんどろになってきたからやめたんです。

○司会 調整費を取るときには、松浦先生が一応目を通してくれはったのを覚えています。

○安陪 病名が漏れているとか年齢が漏れているとか。

○司会 現在みたいにパーッと集めるんじゃないしに、本当に調整でしたな。一応レセプトを見てもらったのを覚えています。そして、調整済みという判押してあったら向こうで通ったという話を聞きますもんな。

○服部 判を押しても、やっぱり戻ってくるのがあって、調整費は何もならぬという声もありました。

○安陪 しかし、あのとき病名漏れとか年齢漏れとかありましたのに、ようしてくれましたよ。

○司会 武田先生は帰ってこられてから、たしかしばらく保健所へ勤めておられましたね。何年ぐらい勤めておられましたか。

○武田 吉村先生のところへ行っただけで、藤岡先生のところへ行っただけで覚えてないです。仲谷先生になってから初めてレセプトを出しに行っただけです。だから、オフエンしたのは昭和30年ぐらいからと違いますか。

○司会 昭和26年に「結核予防法」ができて、われわれも「結核予防医」の指定を受けたわけですが、

そのとき、たしか人工気胸器を備えぬことには指定医の許可を出さぬということを知ったと思うんですが、どうでしたか。

○中嶋 結核予防法が始まったのは昭和26年ですが、指定医になるにはレントゲン機械と人工気胸器を持っているということが条件で指定医になれたんです。

○武田 しかし、持っている人が少なかったから、保健所の機械を利用するという形にして指定を受けたんです。

税金問題

○司会 次は税金のことについてですが、たしか仲谷先生のところに集まって、そこへ税務署がやってきて、初めからこの医者は何ぼ何ぼというように、税金を打ってきたように思うんですけども。

○服部 25年までは藤岡先生の家でやっておった。それから仲谷先生のところになったけど。

○松浦 あそこへ皆が寄って、税務署員が来て、結局個々面接で向こうが大体このくらいということ言うわけです。

○司会 そのときは税務署は何を目標にしようとしたんですか。

○安陪 大体富田林市医師会だったらこのくらいという割り当てが向こうにはちゃんとあるんです。それを配分する。

○司会 患者数の多いようなところは、税務署が目をつけておったわけですか。

○松浦 保険は大体わかりますから、自費患者は保険の何%ということによって割り出していったわけですか。

○杉田 だから閻魔帳というか、下検分の帳面はあるんですよ。堀野先生のところやったら堀野先生のところに税務署員が1日立っていて、患者の数を概略書いて、今度は私のところへ来てまた数を書いていって、「あそこ、はやってますな。もうちょっとおまっしゃろ」などと言って、それらをいろいろ話し合って、そこから手を打とうかとなるんです。

○司会 杉田先生はその当時に幾らくらいでしたか。

○杉田 ぼくは一番最初に税金を納めたのが昭和20年で、3万6,000円です。

○安陪 開業して最初の税金は私と松岡先生が一番多かったんですよ。税務署がカルテを見に来たとき、私は自費患者が多かったので、病院並みにちゃんと金額書いてたわけです。松岡先生もそうでしたので、それでパッと上がったんです。だけど、父も死んだ後やし、ものすごく費用も要ると言って、やっとなあまにあにしてもらったんですが、それは税務署へ行って交渉しました。その次は、岡村先生が、去年はこうでしたと言って全部交渉してくれはったんです。「それならどれくらいなら払えるか」というので、「これくらいなら払えます」と。そのときにみんなパッと下がったと思います。

○司会 そうすると、相当どんぶり勘定だったわけですか。ぼくの知ってるのでは、一覧表みたいなのを書きよったと思うんです。よくはやってる人から書き並べていって、医師会長と副会長か、税務を担当しているような人が3人ほど立ち会って、どんぶり勘定で決めたような気がするんですかね。

○安陪 初め検査に来て、全部向こうが計算していきますからしょうがないんです。その後もそう

いうふうだと困るので、団体交渉しようということで、仲谷先生のときにやったんです。岡村先生が一番最初にそれをしてくれはったんです。それからぼつぼつ上がってますが。

○服部 ぼくのところは中村ですから、中村の役場へ行って、村長立ち合いで税務署と、どのくらいにするかを決めた。税務署は、富田林の管区であんたが一番よくはやっている、毎日140~150人来よったからね。一番多いからといって、パッと出したけれども、村長は「そんなことはない、先生はそんなにはやっていない」と押さえると、村長の言うとおりになりますな。ああいう時代は村長がにらみをきかしましたなあ、村長の言うことはよく聞きました。村長が「これ」と言ったら、「ああ、そうですか」と文句なしですから、ぼくら村長立ち合いのときが一番よかった。村長は絶対的な権限を持っとったね。

○安陪 村で税務のことから全部してまうでしょう。だから村長に権限があるんです。

○松浦 昭和18~19年ごろ、地方事務所がその年の高額所得者を決めておった。これが年間5,000円ですが、ぼくも5,000円にランクされたこともあるんです。

○司会 昭和10年ごろは、医者は普通年間3,000円から4,000円くらいあったと聞いてます。

総会、旅行

○司会 そのほかに、医師会の旅行の思い出話ですが、総会といえば、5~6回くらいまではほとんど料理屋みたいなところでやりましたね。それではおもしろくないというので、バス旅行を始めたのが何年ごろでしたか。

○松浦 一番最初に行ったのは奈良です。

○中嶋 バスでピクニックを兼ねて行ったのは31年からです。

○司会 富田林市医師会が発足した6年ぐらい後から始めたわけですか。年に1回は出ましたな。昔の医師会といえば、総会といってもほとんど総会らしい総会はやってないですね。正直なところ、議事というようなものはやらないで、盲めっぽう皆賛成してましたな。

○杉田 バスに乗るなり酒飲んで、「議事進行」「賛成、賛成」と言って。

○服部 本当に田舎の医師会やったね。

○杉田 近代化されたのはいまの会長になられてからですよ。

○司会 春秋2回の総会のうち、どちらかが旅行ということでしたな。

○武田 一番最初に行ったのは和歌山で、ぼくが計画したんです。

○杉田 その次が有馬へ行ったんですね。

○司会 こんなこと言ったらなんですが、前の仲谷会長は非常にストリップを見るのが好きだったから、行ったときは毎回宴会の後でストリップ見ましたな。

○武田 宴会場まで来ましたな。あそこの毛でめがねをふいてもらって。(笑)

杉田 亡くなられた江村先生(金岡陸軍病院長、陸軍小将)が一番前にかんばって、ストリップ嬢がパーッと広げたら「いいねえ、これはいいねえ」と言いはったですよ。(笑)

○司会 最近は医師会の旅行にしても、ストリップなどよりも歌を歌う方が多いし、昔は今に比べたら皆よく飲んだように思うんですが、どうでしょうか。

○武田 自動車の飲酒運転の規制がなかったです



44年春季総会の帰途(奈良にて)

から、皆相当飲みましたね。

○服部 いまはあかんけど、あの当時の三羽ガラス(武田、杉田、堀野)や、それに死んだ壇上などが一升びん2~3本あけて、夜通し飲んどった。年取ったらいろんな病気がでてくるよ。(笑)

○司会 前の仲谷会長は二次会が好きでしたからね。総会が済んでからもまた別な宴会場で良く飲みましたな。

○武田 白浜で溝川へはまらあったなあ。

○司会 あれはたしか白浜へ行ったときですけれども、総会が済んでから、ぼくと杉田先生が仲谷会長につかまって、どこかへ連れていけということで、タクシニーの連ちゃんに言ったら、ストリップへ連れていきよった。本当の全ストです。そこへつくまでに大きな溝がありまして、そこに木の板がかけてあったんです。それで帰りしな、明るいとこから、急に暗いところへ出たものやから、その板が見えなくて、会長は溝へはまっせずぶぬれになりよった。(笑)

○杉田 真っ暗な野原の真ん中でやっていて、灯の気が見えたら巡査が来るから、そばへ来たら自動車のライトも皆消しよるんです。そこからしばらく手を引っ張ってもらって歩いて行くんですが、「そこへ行ったらあかんで」というところに行ったら溝へはまってしまいはった。(笑)

○司会 まだ思い出話がありましたらどうぞ。

○杉田 その当時、近郊の国立病院以外にこれという大病院がないんで、むずかしい病気になるてきたら、松岡元老を煩わしたんです。

私が、非常に重症結核で骨と皮になっている患者を1人診とったんです。その患者の腹がものすごく大きくなってきて、おかしいなと思って松岡元老に診てもらったら、「これは腹膜炎です」と言って帰りはったんです。そして家へ着きはったところに、頭が黒々とした子供が産まれたということです。そのころは何かにつけて松岡先生にお願いしたことを覚えてますわ。

○司会 ぼくにも同じような話があります。初めてぼくが日本脳炎を診たときですが、熱が続いて急に暴れ出しよったんです。それで松岡先生に頼んで診てもらったら、見るなり「これはヒステリーじゃ」と言って帰ってしまわれたんです。しかし、ヒステリーにしてはえらい熱が高いし、おかしいなと思ってたんです。そうしたら1日ほどして嗜眠状態になってきた。「はあ、これが日脳やな」と思って、松岡先生に「あれ眠ってきましたで、日脳と違いますか」と言うと、「そんなやったら、桃山病院へ送れ」ということで、桃山病院へ送って調べてもらったら、本当に日脳でした。

○松浦 日脳も初めの決め手がむずかしいですな。血液検査もわりあい決め手がないんです。

○服部 最初は「嗜眠性脳炎」と言ったが、それが「日本脳炎」になった。

○武田 警察病院が24~25年ごろにできたんですが、そのときに中村でもう1回赤痢がはったんです。そのとき医師会が手伝わなくて、木村院長が後で「医師会は全然動いてくれなかった」とぐちっておった。

○司会 そのときの医師会活動がそんなんやっただということですか。

○武田 4~5年前、3回目にはやったときは、奉仕で皆出ましたな。

○服部 あれはぼくが会長になってから、47年6月4日から7月2日の日曜日に済んだんですが、ぼくは毎日行きました。

○武田 そのときぼくも行ったんですが、仲谷宗夫先生と保健所の所長とがけんかして、ぼくはいきさつもわからないし、どっちについたらいいかもわからない。

○司会 警察病院は何年に廃止になったんですか。

○松浦 45年ごろです。

○杉田 終戦直後は、私の診た患者では痘瘡が6名出て、そのうち2名が死亡しました。それから大人の仮性コレラ、脱水状態を来すのが流行しました。

○松浦 伝染性下痢症やな、あれは比較的助かりましたな。

○武田 あの時はリンゲルだけで、点滴がなかった。

○安陪 いまはありませんが、 Dengue 熱というものもありました。

○武田 3日熱などもありましたね。

○司会 昔はもちろん脚気なども多かったですね。大体出尽したようですので、この辺で。本日は長時間どうもありがとうございました。

(昭、54.7.30)